



英霊にこたえる会
 102-0073 東京都千代田区
 九段北 3-1-1
 靖国神社遊就館内
 電話・FAX
 03-3261-7415
 郵便振替 00120-7-160184

わが人生を顧みて

英霊にこたえる会中央本部 名誉会長 堀江心え

去る平成二十六年六月十五日(日)、東京都渋谷区の「セルリアンタワー東急ホテル」において、本会の堀江正夫名誉会長の「白寿の祝」が開催され、百七十余名の方々が招かれた。本資料はその祝いの席で参加者に贈呈された「わが人生を顧みて」と題する小冊子から抜粋(紙面の都合上、戦時経験を主体)したものに、同年七月、安倍総理夫妻がパプアニューギニアに訪問された際の経験談を加筆していただき編纂したものである。小見出しは事務局。

◎九十九年の総括

私の九十九年の人生を総括して申し上げますと、一つは、まさしく一人の軍人としての生涯だったと、改めてつくづく思います。参議院議員時代も国防問題に専念し、辞任後今

日まで二十五年もその延長線上で生きてきました。まさしく軍人そのもので、それ以外の何ものでもありません。二つ目は、振り返ると、今日まで長生きをしてきただけのごく普通の男にしか過ぎない私ですが、お陰様でそれなりに幸運にも恵ま

新たな国立の戦没者追悼施設は、心ある多くの国民の声と力を結集して、断固阻止しましょう。

れ、ずつとよき上司・先輩そして同僚・友人更に部下後輩に恵まれ、この人達に教えられ、或いは支えられ、その上に家族にも恵まれて、私なりに充実した人生を送ることができたことです。

そして、特に申し上げたいのは、私のものの考え方、その行動を律する上で、今日まで特に大きな影響を私自身に与えた体験、時機が三つありました。

その第一は、七年間に及んだ軍の生徒時代に教わり培った軍人精神であり、同時にこの時期に、一人の人間としての心の在り方を教わったことが、私にとっては大変幸いだったと思っています。

第二は、「信と愛」、信義と愛です。この「信と愛」をもつて部下とともに生き、一体となつて戦うことを私なりに心がけた、戦場での中隊長の体験です。

そして第三は、あのニューギニアで、極限

状況の中での人間としての生き様、さらに幕僚・指揮官としての在り方をこの身で体験をし、また身近に学ぶことができた、ということとです。

◎一人の人間として心の 在り方を教わった生徒時代

昭和五年、当時一つしか残っていなかった東京陸軍幼年学校に十四歳で入校しました。私の兄は海軍機関学校に進んでいましたし、正直言つて、別に私は陸軍を熱烈に志望したわけではなく、陸軍の大佐だった叔父と配属将校佐治大尉に熱心に勧められて受験しました。受験前、母が毎日毎日新聞を見て、これは覚えておく方がよいと思う難しい字をチエツクしてくれましたが、試験にそのチエツクした字が沢山出て、親の有難さを切実に感じました。

幼年学校は三年間で、校内生活で軍服に似た制服を着ていましたが、軍事訓練は一切なく、午前中は中学校の上級生の課程を文官教官から教わりました。ただ英語はなく、五十名が三つの班にわかれて、ドイツ語かフランス語かロシア語を習いました。午後は体育で生徒監と学年付の下士官が指導します。訓育

は生徒監と上級生により、常住坐臥の間に、軍人としてのあり方、躰、軍人精神等を教わりました。この三年間の幼年学校の生活は、上級生は兄、同級生五十名は皆心許した肉親下級生は弟といったゆつたりした家庭的雰囲気、秋の修学旅行、夏の遊泳講習、毎月各種見学等、楽しい思い出の多い大変いい学校生活でした。

実はこの三年間の幼年学校時代、私のその後の人生にとつて大事な二つのことを教わることが出来ました。それは今日まで私の心の中に強く生き続けている言葉です。

その一つは、「宝は心にあり」という座右の銘です。幼年学校の夏休みに、上杉謙信の居城である春日山に行き、山麓の林泉寺で上杉謙信の話を色々聞きました。上杉謙信の座右の銘は二つありました。一つは「義をもって第一とす」。もう一つは「宝は心にあり」です。

その時私は、俺の座右の銘は「宝は心にあり」だと決めて、今日に及んでいます。その心と心とは、「信と愛」の精神、信というの誠であり、信義、そして愛の精神です。

もう一つ私の心に深く刻まれてきたのは、漢文の飯田先生が、「運・根・鈍」という三字を教えてくれたことです。「運」というのは運

命・人間は生まれた時から、運のいい人と必ずしも運がよくない人がある、それは天賦のもので人間にはどうしようもないものだ。だからそれぞれ、その運命を謙虚に受け入れて、最善を尽くすことだ。「根」というのは根気であり根性。何でも最後までやり遂げる、その根気と根性が必要だ。状況によっては、じつと我慢をし続ける根性もいる、という事です。「鈍」というのは鈍重というよりも、どっしり構え、あまりチャラチャラしない方がいい、何か事があつた時にはまず、どっしり構えて考え、そして行動を起こす、そういうことが人生では大事だと言われました。この「運・根・鈍」と「宝は心にあり」この二つの言葉を、幼年学校から今日までの自分の信条とし、心に深く留めてきました。思い出の多い三年間でした。

◎一年間の自宅療養の後

五十期で士官学校予科・本科へ

幼年学校での三年間を終つて、市ヶ谷の士官学校予科に昭和八年に入校しましたが、実は私は、幼年学校の二年の頃から胸を患っていました。入室・入院・自宅療養を繰り返して、最後は肺門腺結核、実は今でもレントゲンを

撮ると、親指大の石灰で固まった跡があります。そういうことで、四十九期で士官学校予科に入校したものの、最初の身体検査で引っかかり、そのまま入室・入院・そして一年間の自宅療養を命じられました。この一年間、貰っていた教科書で少しは勉強すべきだったと思いますが、どうしたことか一冊も持って帰りませんでした。従って本当にのんびりとした一年間でした。色々な本も読み、色々なところにも行き、退役して隣に住んでいた叔父に漢詩を習ったり、一緒に釣りに行ったりしました。そして翌年、五十期として予科に入りました。

予科では幼年学校の五十名と、中学校を卒業した四百名と一緒に教育を受けます。午前中は旧制高校での教育内容を文官から教わります。午後は教練、幼年学校では軍事訓練なしてでしたが、予科では極々初級の軍事教練、それに馬術、武術、体育です。夏は遊泳演習、年二回の富士の野営演習、秋の特別大演習見学等々の思い出があります。私は、実は幼年学校の二年で病氣して以来保護生徒で、厳しい教練等は全部免除で半人前、いや半人前にもなっていないかたもありません。卒業何ヶ月か前にそれぞれ兵科が決まり、兵科別の

教練が行われます。私は歩兵科になりました。予科卒業と共にまずは隊付、隊付を経て本科入校です。隊付きは約五カ月で上等兵から軍曹までの階級を逐次与えられ、これらの職務について実地に体験し教わります。私は広島島の歩兵第十一連隊で、他の三名と共に隊付になりました。

本科は幼年学校や士官学校予科とは全く違い、徹底的に陸軍初級将校に必要な素養を教えます。午前中は、将校による軍事学です。その中には連隊等の戦術も入っています。午後は馬術、武術、体育、野営演習があったり現地戦術があったりで、随分と忙しい厳しい課程でした。

◎「信と愛」をもって部下と

共に生きた中隊長体験

支那事変が昭和十二年に勃発し、繰り上げ卒業となり、昭和十二年の十二月に卒業し、歩兵第一連隊（広島）付になりました。昭和十三年一月に歩兵少尉に任官し初年兵教育を担当、その教育が終わった後、徐州会戦の最終段階に出征し、連隊旗手になりました。

徐州会戦後、鉄道警備や討伐作戦をしてい

た連隊は、八月初め青島に移駐し、上陸作戦訓練に明け暮れました。その間私は九月初めに中尉に進級しましたが、その月末前任者の病氣内地還送により、突如、連隊砲中隊長を命ぜられました。中尉で連隊砲に触った者は私しかいない、ということでの命課です。当時二十三歳。支那事変と同時に出征し、一年間激戦を繰り返してきた中隊長は、私と同年、あるいは若い者が兵隊の半分、あとは下士官も将校も私より年長です。その上に私は、正直なところ連隊砲は、士官学校を卒業する直前に一週間習っただけです。連隊は、あの七十口径の山砲を四門持っていました。

中隊長になった時、部下に「小銃中隊長から最も頼りにされる、信頼される中隊長になる。砲と共に生き、砲側に死す、そのような気持ちで一緒にやろう」と言った記憶があります。中隊長になって間もなく乗船をして、初めて弾雨をくぐった広東攻略戦、バイアス湾上陸です。その後昭和十六年の六月まで中隊長として、南船北馬、第一線の戦闘に従って参りました。この間に、勿論色々な経験をしました。敵の弾雨下で中隊長として戦闘したのは十四回で、上陸作戦も四回経験しました。

連隊砲に一寸触った程度の私は、実は曲射の射法も教わっていない。今更部下に聞くの

もはばかられる、それもありませんが、何と少しでも小銃中隊から一番頼りにされる中隊になる。そのために、常に最も効果的な支援ができる小銃中隊のすぐ後方に陣地を推進して、直射射撃で第一線に協力してきました。大体射程は千メートルくらいですから、よく命中します。連隊の各大隊には大隊砲小隊が、連隊には連隊砲の他に連射砲中隊があります。連射砲は当たってもプスン、大隊砲は着弾してボカッ、連隊砲はドシーン、全く威力が違います。だから連隊砲が第一線の直ぐ後方で密接に協力するのは、小銃中隊にとっては非常に頼りになるのです。

残念ながらこの期間に部下が七名戦死し、負傷した部下は十二名、戦病死も一名出して仕舞いました。ところが私は、どうしたことか怪我一つしない。中隊長の約二年七ヶ月の間、一回だけ一寸やられました。広西省（現・広西チワン族自治区）から、北部仏印、今のベトナムに進入する時の事です。無血進駐という事で、まず小銃中隊が夜半国境を越え、そこにあったフランスの兵営に接近すると、突然その兵営から猛烈な射撃を受けました。小銃中隊がその兵営の壁際まで進出しているので連隊砲は万一の場合を考え国境に

予め準備していた陣地から射撃するわけにはいかない。前進して、真暗闇の中兵営からの斜射側射を一発ずつで鎮圧する。しかし、塹が高く小銃中隊は兵営内に突入出来ない。そこで連隊砲が突撃路を作る。一発で突撃路ができました。その撃った瞬間に右眼に強い衝撃を受けました。激痛です。手を右目に当てたが血はあまり出ていません。朝になってみたら、その突撃路の塹と連隊砲の距離は三十メートル。飛んできた煉瓦が目にあたり、約二週間紫色に腫れ上がりましたが、それ一回だけです。それに、学校時代は病気づくめで保護生徒で過ごしたのが、中隊長の間風邪一つひかない、元氣そのものでした。中隊長としての責任感がそうしたのか、神様がそうしてくれたのか判りませんが、兎に角元氣そのもので、第一線の中隊長の職を果たすことができました。

本当に部下は若い私と一つになって終始よく戦い抜いてくれました。私は、つくづく部隊の本質は人と人との繋がりにある。中隊長が上下左右本当に堅く結ばれるならば、どんな苦難も克服できるという自信をこの中隊長の体験で得ることができました。

さて中隊長となって三ヵ月。広東攻略戦が

終わり、広東の市内警備をしていた時、初めて部下を処罰しなければならぬ、という事態が起きました。信賞必罰という言葉があります。賞すべきものは必ず賞し、罰すべきものは必ず罰する、言葉は非常に簡単ですが、いよいよ部下を処罰しなければならぬという事態になると、色々なことを考えさせられました。その部下の犯した罪というのは、博打です。駐留間出入りを禁止していた三階で、何人かで博打をした、それが判って調べると、直ぐ三名の名前がわかりました。それで調べた准尉がびっくりして飛んできて、調べればまだまだ増えそうだというのです。「よし、それ以上は調べるな」と止めました。実は三名の中の一人は、隣りにいた連射砲中隊の兵隊です。すぐに中隊長に連絡しました。中隊長は軍縮により大尉で予備役になった年配の立派な人で、連射砲の一人から徹底的に調べたら十余名の名前があがった。中隊長が私のところに来られて、「堀江君、僕は調べてみたらとんでもない数になって、とても処罰できない」と言われました。「ああどうぞ、私の方は二名ですから然るべく処罰します」と返答しました。博打は軍法会議ものです。軍法会議にかけると前科がつき、軍隊手帳にもはっ

きりそれが残ります。聞いてみると、出征以来真面目にやっている男だと言います。その将来のことを考えると軍法会議にはかけるわけにはいきません。それに調べれば他にやった者もいて、その者との関係も考えなければならぬのです。結局私は、窮余の一策で、

「再々立入を禁止していたにも拘らず、そこに入った罪によって、重営倉二日に科す」とし、それを連隊副官のところに持って行きませした。連隊副官がそれを見て「堀江、お前は中隊長の罰則規定を知っているのか、こんなことで重営倉とは、お前もつと勉強して来い」と追ひ返されました。もう一回、同じものを持っていきました。「よく、しっかり検討しただろうな」。「はい、検討しましたが、元の通りです」。連隊副官には怒鳴りあげられましたが、三回同じものを持っていきました。「私は中隊の統率上、これで行きます。私が間違っていたら私を処罰して下さい」と。連隊副官も事前に色々事情を調べたのではないかと思いますが、今度は黙って「わかった。連隊長にそのまま報告する」と、結局私の案を認めて貰い、重営倉二日、そのうち一日は、二人と一緒に重営倉で過ごしました。その後その二人は、本当に立派にやってくれて、私

の在任中に一人は伍長にしました。信賞必罰で罪ある者は必ず罰すると言いますが、そう簡単なものではないことを私は身を以て教えられました。

もう一つ中隊長時代の思い出です。戦後、中国大陸で中国人の軍人が、日本軍によって何千万と殺された、と言っています。私は自分の体験から、そんなことは全くあり得ません。というのは、随分と中国内の各地で行動をし、戦闘していますが、我々が行動し戦闘する場所には、一度も中国人を見たことはないのです。皆逃げている、戦闘が終わって一つところに駐留をすると、情勢をうかがいながらボツボツ帰って来ます。我々としては、その住民と仲良くして、治安をしっかりと維持していかねばなりません。治安維持会を作って共にやっていく為には、そんな殺す等という事は絶対に出来る筈ありません。中には、沢山の兵隊の中ですから個人的に悪いことをした者はいなかったとは言いませんが、彼らが言うように組織的に何千万も殺した等ということは絶対にあり得ない、という事を私はここで明言しておきたいと思えます。

◎ 陸軍大学校入校、そして結婚

昭和十六年七月、士官学校の区隊長を命じられ五十六期を担当しました。そしてその年の十二月、「米英両国に対する宣戦の詔書」が発布されました。その直後に、はからずも陸軍大学校（五十七期）に入校することになりました。まぐれです。一次試験は筆記試験で寧波作戦直後に南京で受けましたが、二次試験は面接が主体でした。恐らく戦場で長い間苦勞してきたし、それにこんなことを言うのはおかしいですが、中隊長の時に「功五級金鷄勲章」を頂いていました。金鷄勲章ももらっているし、まあ陸大の学生にとつてやろうかという程度ではなかったのかと思えますが、まあ入校しました。二年間、学生数は百名です。そして昭和十八年の十一月に卒業しました。百名卒業した中で、当時激戦奮闘中の今村均大將隷下の南東方面に補職されたのは、私がただ一人で二十七歳の時でした。

実は陸大入校の翌年、昭和十七年一月に戦術教官重安大佐に呼ばれ一枚の写真を見せられ結婚を勧められました。一見、その写真に私は、四十七歳で他界した母の面影を強く感じました。当時自由学園高等科に在学中の高橋泰子で十八歳でした。とんとん拍子に話が進み、二月十一日（紀元節）に見合いをし、

三月十日(陸軍記念日)に結納、そして泰子卒業直後の四月二十九日(天長節)に結婚しました。後の話になりますが、料理の料の字も知らなかった泰子が、本格的な料理の道に進むようになったきっかけは、戦後泰子の親友の母上河野貞子先生に薫陶を受けたことです。その後、料理研究家として一本立ちしたのは昭和三十年代半ばで、自衛隊勤務の私を助けながら料理と三人(正純、ひろ子、みや子)の子育てに全力投球でよく頑張ってくれました。

◎ 極限状況の中での人間としての 生き様ニューギニア作戦に従事して

私が陸大を卒業し南東方面に補職された時、ニューギニアでは南海支隊がブナ、ギルワで殆ど玉碎的な戦闘をし、五十一師団(宇都宮)が苦戦したラエ、サラモアも九月の初めには終わり、当時は第二十師団(朝鮮・龍山)のフィンシュハーフェンの戦いがどうもうまくいかない、終末期を迎えようとしていた時期でした。捨て石としてやられたのか、厳しい状況だから若さだけがとりえということだったのか? 陸大の同期生は四十四期から五十一期まで。一番若い五十一期は五、六名、

私の五十期は十七名でしたが、私一人ニューギニアに行きました。出発時、厳しい戦況であることは、大体知っていました。結婚をして息子もこの年の初めに生まれていましたが、勿論再び帰ることは絶対に無いと思って出征したわけです。

ニューギニアの戦いについては、戦争中に「ジャワの極楽、ビルマの地獄、生きて帰れぬニューギニア」と言われ、芥川賞作家の野呂さんが、帝国陸軍が舐めたあらゆる惨苦の集約をしたのが東部ニューギニアの戦場だと書いています。確かに酷い戦場でした。このニューギニアの戦場がどんな戦場であったか要約して言いますと、第一に発端が発端だった。陸上によるモレスビー作戦ですが、海軍の強い要求を受けて陸軍が上陸した時には、モレスビーに通ずる道路があるかないかもわからない状態でした。盲目のまま地上陸し、作戦を始めました。はっきり言えば、初めからニューギニアの戦争は戦理を無視した、無鉄砲極まりない戦いだっただと、私は今でも思っています。

更に言いますと、初めから終わりまで制海権・制空権を完全にとられていました。私がラバウルから潜水艦に乗ってウエワクを経て

第五十一師団司令部に着いたのは十二月二十五日です。ウエワクで、我が陸軍機がツルブ攻撃に出撃するのを見ましたが、それで降戦が終わるまで、わが友軍の飛行機が飛ぶのを見たことは、一度もないのです。まして、海軍の航空機や艦艇を見たことも全くなく、完全に制海権も制空権も米軍に獲られています。そういう中で、陸海空統合の猛烈強大なマッカーサー軍が、ニューギニアの北岸沿いに侵攻してきました。それを我々は三個師団を基幹とした陸上部隊だけで、侵攻を受けました。十七年七月から二年間我々の正面で阻止しました。十九年四月二十二日、敵軍はアイタペ、ホルランジアに上陸。そして八月のアイタペ作戦後は、一瀉千里に沖繩まで行ってしまいました。もう一度言いますと、マッカーサーの進攻を、絶対制海権を獲られた状況下で二年間にわたって阻止したのがニューギニア戦場なのです。

なにせ制海権を獲られていますから、殆どの期間補給が行われませんでした。従って現地のを食べざるを得ません。原住民は当時ニューギニア全体で六十万人でしたが、我々の作戦地域にいた限られた少数の住民が食べる芋、あるいはサゴ椰子から採れるサク

サク澱粉、これらが主食でした。しかしこれだけではとても足りませんので、食べられるものは皆食べました。アイタペ作戦の後ではある部隊はハエもウジも食べました。ウジと言ってもサゴ椰子の澱粉をとった後にわくウジは、これは大きくて油がいっぱいでうまいのです。勿論人間の糞からのウジはとても食べられるものではありませんが、しかしそれまでも食べたのです。そして大勢の兵隊が栄養失調でやせ衰え、次々と倒れていく中を、最後の最後まで戦いました。更に言うと、転進そして戦闘と、連続不断です。その機動が問題です。私が、行って直ぐに踏破しなければならなかったのが高さ三千メートルの山脈です。それをくたびれ果て、やせ衰えた兵隊が越えて行かなければなりません。川が無数にあります。大きい川もあれば小さい川もあります。橋は一つもありません。道は自動車道など勿論なく、全部土人道です。平地は湿地が多く、ラム河とセビック河の間は百キロメートルの湿地帯です。そこを歩いて行って戦闘、戦闘が終わると又歩いて次の戦場へ。ある部隊は、二千五百キロメートル以上をそういう状況下で歩きました。長い連続不断的戦闘と移動で第一線部隊は、どんどん

損耗します。しかし、それを内地から補充することはできませんので勿論戦闘力は激減します。それで、まず師団の後方等の諸部隊、そして軍の後方諸部隊、独立工兵部隊、道路隊、高射砲がつぶれた高射砲関係の部隊、自動車関係部隊、船のなくなった船舶部隊、貨物廠等の各部隊、総ての部隊が全部銃を執って第一線に投入されて戦いました。航空関係もパイロットは後方まで下がりましたが、ウエークには航空の地上関係の諸部隊がそのまま残っていました。これも本場に第一線で最後まで戦闘してくれました。三年間、終戦の前日まで頑張り続けてくれたわけです。言うまでもありませんが、ニューギニアは瘴癘(しょうらい)の地ですからマラリアにかかりますが、勿論医療品はありませんでした。私も例外なくマラリアにかかりました。

結局、この三年間のニューギニアの戦いで、十五万名投入された兵が十三万名戦死しました。一部早い時期に他の方面に転進した部隊もありましたが戦争が終わった時、残っていた兵力は一万三千名、その後も、栄養失調とマラリアのため亡くなり、終戦後内地の土を踏めたのは一万七十二名でした。ただしその兵士たちも五年のうちに、半分になってしまいました。戦死者は十三万名ですが、六十パーセント及至六十五パーセントが栄養失調による餓死でした。

◎ニューギニア戦場を支えた大きな力

①安達二十三軍司令官の存在

こういう厳しいニューギニアの戦場でしたが、色々な力がこれを支えてくれました。一番の大きな力は、安達二十三軍司令官の存在です。当時軍司令官は五十二歳から五十五歳。今思えばまだまだ若造ですが、当時の私から見ますと、本当に年寄りに見えました。よくもまあこの年寄りがやれるものだという感じでした。この將軍は猛烈な將軍、猛将でした。例えばブナ、ギルワもそうですし、サラモアもフィンシュハーフェンも、これはラバウル防衛という観点から、ブーゲンビルの作戦と連撃する必要がある、第八方面軍司令部から一々命令され、退がれと言われるまでは頑張りつて戦います。軍司令官は、「戦いは一期一会だ、負けたらそれで終わりだ。その都度、持っている力を全力投入する」と言われました。同時に、軍司令官の頭にずっとあったのは、全般の作戦に如何にして寄与するかということでした。特にアイタペ作戦の時には、大本

營の早く西ニューギニアに転進をとの内意も伝わってきました。総軍（南方戦線の全陸軍部隊を統括）からは、ウエワク周辺で自給をとの意向も伝えられました。軍司令官は、まだ少し力は残っている、力が残っている間はなんとしてでもマッカーサーの主攻軍を牽制し、我が正面に拘束することにより、その西進を遅らせ、本土防衛に寄与したい、という強い思いでした。とうとう大本営も総軍もこれを了承納得し、軍司令官の意向に副つた命令が出され、それでアイタペ作戦も行いました。こんな厳しい状況下で最後まで猛烈な闘志を燃やした將軍というのは余りおられないのではないかと思っています。

しかしこの安達軍司令官は猛将というだけではありませんでした。部下に対する思いが非常に強い方でした。ラエの作戦の時にも何回かラエまで、制空権をなくしているその間隙を縫い危険を冒して飛行機で飛んで行き、師団長と何遍か会って話合っています。どうしてそこまでされるのか？理由は二つありました。一つは、激励ではありません。「ご苦労だ、そういう気持ちを皆に伝えたい」もう一つは、「そこで師団長とことんまで語り合おう。」その結果については一切批判をすること

も、怒ることも、また一人で悔やむこともありませんでした。そして全部自分の責とされました。アイタペ作戦後、私も何度か軍司令官のお供で歩いて第一線の師団司令部まで行ったことがあります。途中で疲れ果てた兵隊に会うと、いちいち止まって「ああご苦労だね、どうかな、頑張ってくれ」と言葉をかけられる。実は本人は、ひどい脱腸で腸が肝門から出て来るのですが、それを手で突っ込みながらの行動です。勿論車などありません。

杖をつき私達と同じ様に、山坂を越え、原住民の掘っ立て小屋に泊まりながらの行動です。アイタペ作戦が終わった時でした。その地区一帯を管轄しているカラオという大酋長のところに、自ら訪ねて行かれました。そして疲れ果てた将兵を如何に收容し、如何に食べさせすかということについて、カラオに対して具体的に色々頭を下げて頼まれました。

戦争が終わわり、私もお供をして降伏式のためウエワク地区まで行きました。豪州軍の占領している地域に入る直前に私に「堀江参謀、これから豪州軍と会って話し合うなかで、悔しい、何としても我慢できないということも起きるだろうが、じっと我慢するのだよ。残った将兵全員を日本に帰さなければならぬ

からな。」高級参謀の杉山茂大佐、作戦主任参謀の田中兼五郎中佐と三人一緒にお供していましたが、一番若い私にそのように声をかけられました。

豪軍の命令によるムッシュ島への全部隊の集結は十月末に終了し、十一月の末頃から帰還が始まりました。帰還船が入る度に軍司令官は帰還将兵の前で「本当に長い間ご苦労だった、よく頑張ってくれた、有難う。帰ったらずぐ両親のところ、家族のところへ帰りたいだろうが皆病人だ。我慢をせず病院に入り、元気になってから帰ってくれ。そして私に替わって戦死者の慰霊、一緒に持ち帰ることのできない沢山の御遺骨の内地帰還、更に祖国の復興のためどうか頑張ってくれ、後を頼む」と、一人一人の顔を見ながら、涙を流しながら何度も語りかけておられました。

軍司令官も責任を問われて十二月にラバウルの戦争裁判所に出頭されましたが、第十八軍関係でラバウルに收容されたのはインド兵の部隊の将校・下士官でした。インド兵はマレーで敗れ、インド独立軍に編成され、友軍としてその一部がニューギニアにも来ていました。ところが戦争が終わった途端にその連中は、「食べるものも食べさせてくれなかった。

こんなひどい目にあった、我々捕虜を虐待した」ということを豪州に訴える有様でした。

軍司令官も実は、昭和十九年の八月初め以降終戦まで一粒の米も食べておられません。無いのですから、皆食べていないのです。ところがその部隊の将校・下士官がそれらを主張しても退けられる。軍司令官は、懇々と全般状況を説明され、そして、「それでも責任があるというならば、その責任はすべて自分が追うべきもので、この部隊の将兵には、何の罪もない。自分を罰しろ」と強く主張されました。結局最後は、ご自分も責任を問われて終身刑になりました。その晩、型のごとく小刀で腹を切つて、あとは親指で頸動脈を押えて自決されました。遺書を残しておられまして、陛下に対する敗戦の謝罪等が色々書かれています。「本当に人間が耐える限度を遙かに超えた戦場で、しかもなお私の命令により、将兵は皆、耐えがたきを耐え祖国のために頑張ってくれた、そして沢山の将兵が祖国に一命を捧げて護国の鬼となり死んでいった。自分もこれら将兵とともにニューギニアの地にとどまる。」と。私は、猛将であると同時に聖将であるかと確信しています。今日まで接した沢山の将軍の中で、これ程愛情に満ち、これ程素

晴らしい将軍は見たことがありません。この将軍の力というものがニューギニア作戦を支えたのだと、私は今でも強く思っています。

② 終始活躍した二人の軍参謀の存在

二番目は、終始活躍した二人の軍参謀の存在であります。将兵が沢山亡くなった中で、八名もの軍参謀が戦死しました。当初編成時の軍参謀は七名で、あと補充でなった者を含めると全部で十七名です。初めから最後までいた二人というのは、杉山茂高級参謀（陸上自衛隊入隊・陸上幕僚長）と田中兼五郎作戦主任幕僚（陸上自衛隊入隊・東部方面総監）です。二人とも大変立派な人でした。本当に軍司令官の心を心として一体となり、積極的に幕僚勤務を全うしておられました。特に田中さんは、私とたった四歳しか違わないのにこんな素晴らしい凄い人がおられるのかという感じでした。頭は勿論素晴らしい。将来に対する洞察力、的確な部隊処理、不動心、部隊や部下等に対する思いやり、進んで第一線に出かける行動力等々、本当に立派な立派な参謀でした。

ジャングルのニッパハウスで夜、目が覚めると、部屋の片隅にローソクの灯りがゆれ、その暗い灯のもとで鉛筆の頭部をかじりなが

ら、一生懸命に考えていた姿が今でもはっきり目に浮かんできます。

私は戦争から帰り、家内に言ったことがあります。「田中兼五郎さんが、堀江お前は右を向いてまっすぐ進めと言ったら、右へ向いてまっすぐ進む、左へ行けと言ったら左へ、そのまま止まっておれと言ったらその通りにする。堀江、今腹を切った方がいいのではないかと言われたら気持ちよく腹を切る」。この気持ちは、田中さんが亡くなられて二十四年経った今でも変わりません。それだけ素晴らしい人でした。（東部方面総監の時、私は幕僚長としてお仕えした）田中さんのお墓は私が住んでいる小田急線の春秋苑というところにあります。私は今でも毎年春秋のお彼岸には、お墓に必ず行ってお参りしてお花を供えます。命日が四月の十九日ですが、まだ奥さんもお元気で、命日にはお宅にお参りをさせて頂いています。このぼんくらの私をそうまでさせている力は、これは田中さんの大きさ以外の何物でもありません。戦後個人感状を貰われましたが、この田中さん、そして杉山さんの大きな力を挙げなければならぬと思います。

③ 全部隊全将兵の敢闘

第三番目の力は、言うまでもなく、第一線

部隊と後方部隊の全部隊全將兵の敢闘です。あの極限下の状況の中、長年月に亘り、皇軍の伝統を守り本当によくやり抜いてくれました。家族のことを思いながら、死んでいきました。天皇陛下のために、国民のために最後の最後まで頑張りながら死んでいったのです。これはニューギニアでの私事の話です。

ニューギニアの前線から十九年の三月、ウエワクに転進してきました。飛行場は爆弾で全部穴だらけでしたが、飛行場の奥にはまだ第六飛行師団の司令部が残っており、そこへ連絡に行くために、その穴だらけの飛行場を突っ切って行きました。丁度その時、二十七機の B 十七の編隊が真正面から飛行場に向かってきました。伝令と一緒に近くの弾痕の中にしゃがみ込み、私が、「今落とさなければ大丈夫だ」と言った途端に、爆弾がパラパラと落ち出しました。私は思わず「しまった」と言いました。それに対しサラモア以来の歴戦の伝令は「参謀殿、しようがありませんよ」。本当の話です。着弾して破壊する音が段々と近づいてくる。長い時間でした。初めに頭に浮かんだのは、正直に言いますと家内と当時一歳足らずでまだ生まれただばかりの息子の姿。「ああこれはいかん」とあわてて自分に言い聞か

せ、頭の中で天皇陛下万歳、天皇陛下万歳と言っていましたら、弾は私のところを越え、後ろの方で破裂していました。大体戦場での將兵の心はそういうものだと思います。家族のことを思いながら、家族のために、そして天皇陛下のために、国民のために命を捧げたのです。本当に皆よくやってくれました。

④ 原住民の協力

更に第四番目に挙げなければならぬのは原住民の協力です。数少ない原住民の助けがなければ、とても最後までやれませんでした。最後まで一万余名も残れなかったのです。原住民は、我々の侵攻占領により、平和な生活をすっかり破壊され大変な被害を受けました。にもかかわらず、我々に対して戦中も戦後も一貫して良い感情を持ち続けてくれました。自衛隊を辞めた年に遺骨収集に行った時、当時軍司令部で水汲などをしてくれていた少年が立派な青年に成っており、ウエワクのホテルにやって来ました。昭和四十年ですから戦後二十八年経ち、その間に椰子林も増え、椰子林の中には力カオも植わり、道路もウエワク周辺など自動車道路が一応できています。小さな商店も何軒かあります。「当時と比べる」と随分良くなったね。豪州に色々やっても

らって、良かったなあ」と言いましたら、「いややオーストラリアはフレンドだ、しかし、ジャパニーズはブラザーだよ」と言うのです。「え、何故これだけよくやってもらった豪州が単なる友達で、戦争中あれだけ皆を苦しめた日本人が兄弟なのだ？」と聞きますと、「それはそうだ。だって日本人は、我々と同じものを一緒に食べてくれた。日本人は、我々と一緒に肌を寄せ合わせて寝てくれたではないか」と言います。要するに日本人によって初めて人間として遇してもらった、と言うことなのです。そう言われてみると、当時も教会があちこちにあり、牧師は白人で、殆どの住民はクリスチャンです。ところが、教会には入れるものの、牧師の私生活には一切近づけないのです。自分達とは別な人間として扱われていた、ということなのです。そのニューギニアの人たちのお陰は、私どもは決して忘れることはできない。戦後、我々生き残った戦友だけで作った友好協会、議員時代に作った日本パプアニューギニア友好議員連盟等々、只々恩返ししたいという気持からのものです。さて戦後今日まで私なりにニューギニアの戦場体験を、自分の生き様に出来るだけ反映させようと思ってやってきました。一つだけ

申しますと、部隊の強弱はすべて指揮官にかかってきます。指揮官は、その任務を遂行出来るだけの能力を勿論持たなければなりません。責任感もなければ駄目ですが、根本は、部下とどのように結びつくかです。部下と本当に真に一体とならなければ駄目なのです。

「信と愛」の絆で結ばれるように一生懸命努力する、そのような指揮官でなければ、いざという時に役に立たないと思います。生意気なことをいうようですが、自衛隊にいる時、高級指揮官の皆さんはどうも自分に甘え、部下に甘え、世間に甘える人が多いように感じました。そんなことで部下がいざという時に本当に命をかけてついてきてくれるのか？一緒にやってくれるのか？ 上級者になるほど自分に厳しく、そして部下には愛情を持って接するのはとても大切なことなのです。

××××××××××××××××××××

昭和二十一年一月末浦賀に帰国後、久里浜次いで伊東で残務処理をし、三月末に除隊しました。泰子の実家に帰る途中で広島に寄り、原爆による我が家の消失や多数の親戚の犠牲、一面焼け野原の状況を見聞し、改めて敗戦の生々しさを感じましたが、疎開していた父親の元気な姿に安堵し、宮崎県飢肥に帰りまし

た。飢肥では泰子の祖母や両親、沢山の親戚等に本当に温かく迎えて貰い、多くの知己も得、私にとって飢肥は第二の故郷になりました。

◎ 人生の華・都城連隊長時代

堀江正夫名誉会長は、昭和二十七年に警察予備隊に入隊（三等警察正）。第一幕僚監部第三部勤務を皮切りに、北部方面総監部第三部防衛班長、陸幕第三部兼務計画班長、第四十三普通科連隊長（都城）、陸幕第三部副部長、東部方面総監部幕僚副長（防衛）、同幕僚長、第三師団長、陸幕第五部長（現教育訓練部長）、陸幕幕僚副長、西部方面総監を歴任されたが、この陸上自衛隊時代で、堀江名誉会長が、「人生の華」と称された都城での連隊長時代について記述し、他は紙面の都合上割愛させていただきます。（事務局）

昭和三十七年の七月に都城の初代第四十三連隊長を命じられました。天にも昇るような気持ちで都城へ行きました。三年間の業務計画班長で都城へ行きましたが、これからは部下と一緒に走り回って色々なことをやるのだという心躍る思いでした。連隊は、伝統ある旧軍の第六十四連隊、第二十三連隊の兵舎の跡です。素晴らしい伝統を継承した部隊、いざという時、本当に役に立つ精強な連隊に鍛えあげたい、これが私の一つの思いでした。

もう一つは、当時はまだ愛される自衛隊でした。愛される自衛隊では駄目で、信頼される自衛隊、いや信頼されるだけでは駄目で国民・国民と一つになった自衛隊でなければならぬ、そのために努力しようと考えました。この二つの大きな思いを強く胸に懷いて連隊に行き、これを統率方針にもしました。連隊創設以来既に五十二年が経ち、連隊長も今の連隊長で二十六代です。歴代の連隊長が、初代連隊長の私の統率方針をそのまま踏襲してくれています。良いか悪いか判りませんが、現実には五十二年間長く伝統を守りながらこれを拡大発展させてやって呉れています。実に有難いことです。

連隊に行つて初めにしたことが二つあります。一つは、連隊の正門を入った所に標柱があり、「明るく逞しく」と書いてある。明るく逞しくも良いですが、しかしこれを、すぐ直してもらいました。「我々は国民の最後の保障である」、隊員に本当にその事を自覚させたい、国民の皆さんにも自衛隊の本質はここにある事を知つて貰いたいという思いでした。もう一つは、中隊長と主要な幕僚と一人一人時間をかけて二人だけで話をしました。中隊長には、一週間営内に泊まり込みを命じ、中隊長の

隊員全員と一人ずつ話合うよう指示しました。私は部隊では人と人との繋がり、「信と愛」の絆で結ばれることが一番大事だという考え方を戦場の中隊長の経験から強く持っていました。そのため第一歩はお互いが知り合うことであると信じ、実践したのです。その後、統率方針に基づき、色々と実行しました。

一つは、いつでも役に立つ部隊にするための訓練です。当時火曜日は総出訓練日でした。総出訓練日は、雨が降ろうが翌日どんな大事な事が計画されていようが必ず確実にやりました。予め計画を出させて、当日は私や幕僚がその状況を視察し指導します。都城は霧島演習場まで六十〜七十キロメートル、十二月と一月を除いて毎月野営を行いました。大抵月曜日の朝出かけ、金曜日の夜遅くか土曜日の朝早く帰隊します。中隊長の体験を生かし、実践的訓練を徹底しました。

実は陸幕第五部長（現教育訓練部長）の時、空挺部隊の演習を富士演習場で視察したことがありました。講評は、「今行なったこの部隊の訓練は訓練になっていない。ただ行け行けどんどんで元気よく走っただけで、相手の敵火がどうで、これをどう処理するかというよくなことを全然考えていない。そんなことで

どうして訓練と言えるか。実際戦場では、元氣だけでは進むことはできない。一つずつ相手の力を潰しながら進む。そのようなことをしっかりと修練しなければ駄目だ」霧島演習場の防衛訓練では鉄条網の張り方も、掩体の作り方も知らないのが現実でした。翌年はまず、一ヶ月間それらの幹部教育を行ってから部隊訓練に移りました。

「中隊長を核心とした中隊全体の練度を上げなければ駄目だ」。当時は、選手による射撃競技会や武道競技会が盛んに行なわれていました。私は選ばれた個人の能力を上げるのではなく全部の能力を上げるため、競技会は中隊全員による競技会であるべきだと考えました。特に射撃は選手による競技会では、窮屈な実弾の消費が選手に集中し、一般の隊員の訓練用の分が減らされてしまい、部隊を精強にすることにはなりません。

もう一つは県民との一体感。着任後まもなく運動会がありました。運動会の名物は中隊毎に準備する仮装行列です。これが大人気で、市民が部隊に集まってしまい、同日行われた都城の秋祭りは閑散としていた程だと聞かされました。私は、都城の市民とともにお祝いをして喜ぶべきではないかと考え、翌年から

運動会を秋祭りの少し前にして、その仮装行列は市の秋祭りに繰り出したところ、大変喜ばれました。それまでの仮装行列の衣装等は隊員が全部、各自で金を出して作っていましたが、私が連隊を去った翌年には、市と市の商工会議所から補助金が出て、それで隊員は金を出さなくて済むようになりました。

毎年パレードを市内の大通りで行っていました。私は、都城だけではなく県内広く行くべきだと考え、創隊の年の秋、県北の延岡から始めました。国道を南下して宮崎市まで途中三カ所でも行い、その市町長だけでなく、近隣の町村長にも檀上に上がって貰いました。当時、都城にしか自衛隊の協力会はありませんでしたが、県知事や県の商工会議所会頭と話して県の協力会を作り、県知事に県の協力会長になって貰い、更に全県下の市町村長に、その市町村の自衛隊協力会を作りその会長になつて貰いました。自衛隊を身近に知って貰いたいという思いです。私が去った翌年は、県下の全部の市町村議会の議長が、都城の自衛隊に「一日入隊」をして呉れ、出身隊員との結びつき強化のため、県内の市町村ごとに郷土旗も作つて貰いました。県民との一体化のため、無い知恵を絞り、皆に協力頂き、努

力をして貰いました。

次は隊員のための施策です。当時は、操縦免許を取るために自衛隊を志望する隊員が多くおりましたが、予算の関係上、南九州には熊本と国分にしか教習所がありません。そのため、なかなか免許取得ができませんでしたが、丁度、内局で課長をしていた高田さんが、宮崎県警の本部長になられ、早速お願いして、自動車教習所の計画を作って貰いました。セメントが必要ですし、砂利も要ります。セメントは市長から寄付して貰い、砂利は近くの河川事務所ですべて来て、余暇に隊員の手で作りました。検査は、県警が設計したものですから文句なしに合格です。これは隊員喜んで貰いました。

「都城には官舎が少ないから官舎を建ててもらおうよう努力しようか?」と言いますと、「官舎など要りませんよ」と言います。どうして要らないのかと尋ねると、この辺は官舎代より個人の家を借りる方が安いとの事なのです。訓練場の隅に官舎を作れば土地代も要らないし・・・という私のもくろみはかきませんでした。

連隊本部の跡に郷土館を作りました。郷土宮崎県の歴史を隊員にしっかり認識させたい、

それを作れば、当時はまだ博物館など何処にもない頃ですから、学校の子供達が見学に来て呉れる、それで又自衛隊と市民を結ぶことになるという思いでした。展示品の多くは、県内の有志から借りてきました。古い木造の連隊本部跡ですから、火事になったら大変だ、防火施設をしっかりと整備しなければなりません。防火用水の予算は中央から貰いましたが、それ以外は市長からセメントを貰い、砂利を貰い、設計は業務隊で行ない、施工は隊員が余暇に行なって防火用水兼プールを作りました。これは隊員や家族が非常に喜んでくれました。これははまだ学校にプールがない時代ですから、近くの学校の子供達に日曜日等に自由に使わせました。自分ながらあの手この手でよくやったものだと思っています。この連隊長の一年半近くは、自分にとつては、人生の華だったのではないかと思うぐらい、本当に気持ちの良い部下と一緒に過ごした期間でした。これも部下隊員と信頼感に結ばれ皆一体となり、又知事や市長等多くの人の協力あつてのことで真に感激に堪えません。

◎参議院議員出馬秘話

昭和五十二年に参議院議員になりましたが、

勿論全くなる気はありませんでした。その素質もあるとも思わないし能力があるとも思いません。昭和四十九年の終わり頃か五十年の初め頃、それまで何人かが参議院議員の全国区を狙いましたが誰も当選できません。どうにかして五十二年の選挙では一人送り込もうと皆で相談しました。私もリタイアして、その仲間の一人でした。初めは元陸幕長の杉田一次さん(陸士37期)が、本人もやる気になり是非やってみようということでしたが、最終的に色々な関係で降りられ、次に元北部方面総監の広瀬栄一さん(陸士43期)を皆で推しましたが、どうしても受けて頂けない。段々議論するうちに、私という声が出てきました。とんでもない、勿論やる気はありませんし、家内以下子供達も皆反対です。そういつた中、杉田さんと田中さんが三度家まで来られました。昔から将を射んとすればまず駒を射よ、ではありませんが、家内の説得です。三度目の時、私の下の娘が家内に、「パパがあれだけ尊敬しているお二人が三度も見えたのに逃げるのは、男として卑怯だ」と言い出し、更に「今まで料理研究家としてやってこれたのは、全部パパの支援があつたからではないか。一度位、ママはパパの支援をしたらどう

か」。その言葉に家内も参り、結局私も引受けざるを得なくなりました。何の力も無い私に、皆さんから本当に力を頂きました。当時の巨理防衛事務次官も全陸海空自衛隊も、そして陸海空の O B の皆さんも、更に神道政治連盟、傷痍軍人会、世界救世教、勝共連合等々の皆さんも、多くの人々から皆一生懸命に支援して頂きました。当時の人々の多くは鬼籍に入っておりますが、旧姓祖父江さんや大藤さんや緒方君等とは、今も時々、当時の苦労話に花を咲かせています。

お陰様で、八十二万票で当選させて頂きました。(議員時代の活躍は割愛)

◎日本郷友連盟会長から

英霊にこたえる会会長へ

参議院議員退任の平成元年の春には、広瀬栄一前会長の遺言ということで、防衛関係団体第一号の日本郷友連盟の会長に就任しました。日本郷友連盟は昭和三十一年、英霊顕彰と国防思想の普及を目標として、旧軍人を中心に結成された全国組織の国民運動団体であり、会勢は四十万を超える時代もありましたが、年の経過と共に急激に会員の減少を招き、その活動にも陰りを見るようになっていた時

期でした。何とか再建したい。皆で力を合わせて色々努力しました。全国各種団体のさきがけとして実施した「昭和の日」設定の、全国の組織をあげての署名運動や創設四十年史の発行、同記念募金の実施等もその一環でした。又、会の目的達成のため連盟に安全保障研究所を設立し、同志の諸君の活躍により安全保障や教育や憲法等委員会での検討の成果を政府等に提言すると共に、国民に対する啓蒙普及に努めました。平成十一年幸いに元陸上幕僚長で統幕議長をされた寺島泰三氏に会長の職をお引き受け頂き、名誉会長として第一線から退きました。

英霊にこたえる会との縁は郷友連盟会長となった年に、副会長になった時に始まります。これは自民党の靖國問題懇談会の審議に毎回有末精三郷友連盟会長が、英霊にこたえる会副会長として出席しておられたのを見ており、自ら望んでこの職に就かせて頂きました。平成八年には井本臺吉会長の急逝に伴い、第三代会長になり、平成二十一年に強力な中條高德氏にその職をお引受け頂き名誉会長になりました。この間全国の同志の皆さんと「総理等の靖國神社公式参拝の実現とその定着」、「天皇陛下の御親拝の実現」を目指して努力

し、又この間提起された靖國神社に代わる施設の建設は当時一応阻止することが出来、又昨年七年振りで安倍総理の参拝を見ることが出来ましたが、我々の目標達成には道なお遠きを感じざるを得ず、誠に残念の極みであります。率直に申し改正憲法では、靖國神社への総理等の参拝の明記はもとより、更に国家護持可能な決定をと心から祈つてやまないところであります。

◎戦没者の御遺骨

帰還事業にかける思い

総理等の靖國神社公式参拝の実現とその定着、天皇陛下の御親拝の実現、靖國神社の国家護持を可能とする憲法の改正等の国の基本にかかわる問題と共に、戦後一貫して私の頭を占めてきた問題は、過酷を極めたあのニューギニアで一命を国に捧げた十三万御英霊の慰霊顕彰と草蒸す屍水漬屍となつて帰國の日を待ち焦れておられる御遺骨の早期帰還と戦時中の協力に対する感謝の目的を達成するためのパプアニューギニアとの友好親善関係の促進維持でした。

戦後、杉山、田中両先輩を中心として、これらの目的達成のため、まず東部ニューギニ

ア戦友会を結成しました。そして慰霊顕彰のため、中央での靖國神社での慰霊祭、現地慰霊訪問、マダンの慰霊碑建設、ウエワクの国立慰霊碑建設協力、会報の発行の他、各地各部隊による慰霊祭の実施、現地慰霊旅行の実施、栃木、長野、高知の慰霊碑の建設等、数少ない生存戦友はご遺族共々皆で力を合わせ真剣な活動を展開しました。

御遺骨の収容は昭和二十九年大成丸による収骨以後途絶えていましたが、四十四年に戦友会独力による一ヶ月に及ぶ遺骨収容を実施し、今日まで二十六回に亘る厚生省の御遺骨収容協力を行ってきました。残念ながらこれで御帰国できたのは一万九千柱、その他を合わせ全部で五万柱余、なお八万柱近い御遺骨が帰国の日を待ち焦れておられるのが現状です。

パプアニューギニアとの友好親善については、独立直後の昭和五十一年に日本パプアニューギニア友好協会を設立し、会員の老齢化により平成十年解散までの二十三年間毎年技術者等の日本研修の招聘、高等学校入学金の提供、災害時の見舞金、日本企業の現地展開支援等々の活動を行って、私はその第三代会長として微力を尽くさせて頂きました。又

議員当時有志と諮り日本パプアニューギニア友好議員連盟を結成し、パプアニューギニアとの友好親善協力関係の強化に努め、私は設立時その副会長を、そして現在はその特別顧問をさせて頂いています。戦争中大変迷惑をかけたにもかかわらず大変な協力を賜った、それに対する恩返しです。何とかしてパプアニューギニアの発展に少しでも寄与したいという思いです。

戦友による日本パプアニューギニア協会の解散後、新たに日本パプアニューギニア協会が設立され、現在第二会長山下勝男氏の下で活躍されていることは、大変有難いことと感謝しています。

先に述べた御遺骨の帰還事業は率直に言って厚生労働省の努力にもかかわらず遅々として進まず、まさに百年河清を待つ状況にありますが、幸いに昨春自民党に特命委員会が設立され、現在、政府の全責任の下に厚生労働省、外務省、防衛省が相協力し、本格的な体制の下、抜本的な方策を講ずる方向で審議が進められつつあるのは、誠に意義深くかつ有難い極みです。予てから東部ニューギニア戦友遺族会会長の職にある私としては、有志の遺児の皆さんの並々ならぬ尽力に心から感謝

し、その更なる奉仕活動に大きな期待と祈るような思いを寄せ乍ら、この法案が成立し、本格的帰還事業の開始を見届けてから、あの世に行きたい。そうでないとあの世で亡き戦友達に合わす顔がないと、心から思っている毎日です。白寿を迎え、何時あの世に逝っても思い残すところはないという思いと共に、最低これだけはしっかり見届けてからに旅立ちたいという、相反する複雑な心境の中にいるのが、今日此の頃の率直な私の思いです。

本年七月六日から安倍総理はニュージーランド、オーストラリアに続き、パプアニューギニアを訪れ、十一日にはウエワクの日本政府建立の「ニューギニア戦没者慰霊碑」を昭恵夫人と共に参拝されました。

現役総理がパプアニューギニアを訪れるのは、昭和六十年の中曽根総理以来二十九年振り、また当初から外交日程に入れての海外戦没者慰霊碑への参拝は今回の安倍総理が初めてでした。

私は東部ニューギニア戦友遺族会会長として、また第十八軍の生き残りとして、十三万の英霊に代わり、現地で総理にお礼を申し上げたいと、日本遺族会の尾辻秀久会長、森田次夫・増矢稔両副会長等と共に、現地で安倍

総理ご夫妻を出迎えました。

ウエワクは、この日は学校、役所などすべて休日で、安倍総理の行くところ、手作りの横断幕が掲げられ、沿道では切れ目なく両国の小旗を振る現地の人達の歓迎ムード一色で、安倍総理も感激され、昭恵夫人は感動のあまり涙しておられた。

総理は、慰霊碑参拝後ソマリー知事による総理歓迎会に臨まれ、私は遺族会代表と共に同席させて貰えたが、その後別室で総理ご夫妻と二十分間、遺族会会長と一緒に懇談の機会を頂いた。席上、終始私一人が喋ってしまったが、東部ニューギニアでの惨烈な戦いの現実と将兵の敢闘、厳しい戦況の中で原住民が積極的に協力してくれ、戦後も良い関係を維持して来た実態、遺骨収集の現状等について語り、私の永年の思いの丈を総理に吐露することができたのは望外の喜びであった。

帰国時にも特別に御配慮を頂き、総理の政府専用機に同乗を許され、更に機中の総理ご夫妻の食事に陪席させて貰えた。これは一人の榮譽ではない。死んだ戦友たちに替わって総理から殊遇を頂いたものと思っている。

◎ 結び・感謝とお礼の気持ち

これまでの人生を顧みますと、随分海外旅行を重ねて来たものだと思います。議員当時は、公務による米国やヨーロッパ、私的な議員活動としてのアジア諸国が主でしたが、その後は、郷友連盟の視察旅行、十七回に及ぶニューギニア現地慰霊（安倍総理のこの度の東部ニューギニア戦没者慰霊碑参拝に立会で十八回となる）、更に家内同行の世界各地への旅行を楽しみ、七年前には「飛鳥号」で百日間の世界一周旅行、その前からの市川、津坂、田端、佐藤、間宮、富沢各ご夫妻等との年一回のヨーロッパ旅行も十年近く続いています。この間の訪問国八十九国、海外旅行の回数も二百五十回を超えました。これは、私の未知なものに対する好奇心がもたらした成果とも言えるでしょう。

かつての勤務地、熊本及び都城の創立記念日の訪問を現在も毎年続け、「元西方総監の会」、我が家での「都城会」ももう何年になるでしょうか、これらも、今日までの我が生き甲斐の一つになっています。

議員在任中に始めた散歩は、三年程前腰痛を感じるようになる迄二十数年一日平均一万五千歩以上を目標に休みなく続けてきました。今日まで元気で来られたのは、家内の結婚後

七十二年間に及ぶ毎日の食事はもとよりですが、この散歩の効果もあったのではないかと思っています。この間の徒歩距離は、塵も積もれば山となるではありませんが、十一万キロメートル（地球二周半以上）を超えました。三人の子供、五人の孫、三人の曾孫に恵まれ、元気で温かく、平穩無事な家庭を持つことが出来ました。幸せを感じながら、毎日を送っています。

今、静かに今日までの九十九年間を顧み、今日まで元気で私なりに充実した人生を送らせてくれた天に感謝を捧げたい。

そしてこの間、私を導き教え、私を支え助けて頂いた数多くの尊敬する上司先輩、敬愛する同僚友人部下後輩、お世話になった皆様に、更には私を産み育て支え続けてくれた亡き両親、妻や子供や孫や多くの肉親親戚に改めて、重ねて、心からの感謝と御礼の気持ちを捧げたいと思います。有難うございました。感謝々々の心で残された日々を貫きとおして、最後は「有難う」と言つてこの世を全うしたいものだと思います。皆々様、本当に有難うございました。

皆様のご健勝とご多幸を心からお祈り致します。